

音が楽しい！



声

歌手はその声域によってソプラノ、メゾソプラノ、アルト、テノール、バリトン、バスなどに分類されている。普段の話し声の高さと、訓練を経て磨かれた歌声とは必ずしも一致しない。会って話をしていると低く落ち着いた柔らかい声なのに、歌わせると張りのある非常に高い声が出る、などという事はざらである。また歌手の歌声の高さは年齢とともに少しずつ低くなる傾向にあり、声の質も次第にまるく変わっていくのが普通である。

オペラに出演する際「ソプラノだから」といっても、単にその声域でこなせるものならば何でも歌わせてもらえるわけではない。声の質に対応した役というものが存在し、歌手もそれを充分に考慮しながら自分のレパートリーを増やしていく。「私はこの役が好きだから」だけでは檜舞台には立てないのである。

そういった声質の分野のひとつに「コロラトゥーラ・ソプラノ」と呼ばれる、ソプラノ歌手の中でも特に高音域、そして技巧的能力が要求される華麗な声がある。モーツァルトの歌劇「魔笛」の「夜の女王」といえばわかりやすいだろうか。単なる音楽的才能や声の美しさに加えて、コロラトゥーラ独特の声の張り、それをコントロールするために必要な運動機能の敏速かつ微妙な反応が必要のため、人によって向き・不向きがあり、ソプラノならば訓練次第で誰でもなれるというものでもない。どちらかという東洋人にそれを得意とする歌手が多いが、いずれにせよ稀少価値があり、有名になればスター・テノールと並んでお金をガツポリ稼げる特別技能者といえよう。

歌唱の際の難しい技巧とは、機敏な動きでありながら、しかも一音一音が分離して聞こえなければならぬ「速いパッセージ」、隣接した音を交互に速く歌う「トリル」、和音を構成する音の範囲内で素早く歌う「分散和音（アルペジオ）」、一音一音を短く切る「スタッカート」、そしてアリアの最後などによく出て

くる高音で長い「決め音」などだろう。この中でも「最後の決め音」が体力的に一番消耗する。効果が華やかなだけにそれに見合う体力・気力とコンディションが必要で、気分が活気がない鬱状態の時などはとても練習する気になれないという。さらにステージではごまかしのきかない一本勝負、その日の決め場の出来不出来のみで歌手としての能力を評価されてしまうため、ストレスも多い。

ところでグルベローヴァでもフレニーでもカレラスでもパヴァロッティでも、あるいは歌を専門としない普通の人間でも、誰でも声は声帯を使って出している。

声帯は二本の白い象牙色をした伸び縮みするゴムバンドのようなもので、気管の上部、ちょうどのどぼとけのあたりにある。普段の呼吸の際にはV字形に開いているが、声を出す時にはこの声帯が閉じ、その間の細い隙間を肺からの呼気が押し通る。その時に生まれる震動が「喉頭原音」と呼ばれる「声の素」である。この段階の音はまだ「声」と呼べるものではなくただ「ブォー」というだけの何の色気もない震動音である。ちょうど破れ障子に風が当たると障子紙がビーンと鳴るのと同じ原理で、声の男女差などもここではまだあまり認められない。

この無味乾燥な喉頭原音がどうしてちゃんと声としてのめりはりを持ち、その美しさで何千人もの聴衆を魅了するまでになるのだろうか。

声帯で作られた喉頭原音は、人間の頭部にあるいくつかの共鳴腔と呼ばれる空洞部分に共鳴する。鼻腔（鼻の奥）、咽頭（のど）、口腔（口の中）などの空洞は誰にでもすぐわかるが、それ以外にも副鼻腔と呼ばれる空気で満たされた空洞が頬骨の裏、ひたい、目の裏その他の場所に何か所かあり、それぞれが微妙に影響しあって声の大きさや音色などが決まる。共鳴腔はちょうどヴァイオリンの胴のような働きをし、この

部分での共鳴が良いとボリュームがあつてよく通る響きの良い声になる。

声を形成するにはこの共鳴腔ばかりでなく「構音器官」と呼ばれる舌、唇、軟口蓋（口腔の奥、ノドチンコのあたり）などの器官も必要不可欠である。ひらたく言つてしまえば共鳴腔は声の響きをつかさどり、構音器官は言葉の発音を支配する。これらのほんの微妙な変化でさえ声色に大きな影響を与える事は、くわえ煙草やガムを噛みながら、また腹這いで喋っているのが、電話で聞いただけでもすぐ見抜けることからよくわかる。

唇、舌、あごなど人間が直接自分の意志で動かせるところは訓練も行いやすいが、ソロ歌手として人々に納得してもらうまでには、もっと専門的な訓練が必要である。それも声をうまく響かせる、という行為は「ここにこう力を入れるとこうなるよ」といった単純なものではなく、非常に個人差の大きい感覚的なものであるため、他人にはなかなか教えにくいし教わりにくい。やつとフィーリングをつかんでも、自分の声の変化は自分では客観的にチェックできないので、常に良きアドバイザーが必要である。

普通に喋る「地声」は、発声の勉強をするにあつて胸声と呼ばれる。ジャズのヴォーカルやシャンソンなどは胸声のまま歌われるが、この声はクラシック畑ではまだ使い物にならない。これに対して小さい子供のキンキン声は頭声と呼ばれるが、これがクラシック歌手にとって重要な要素で、「息がうまくツボに当たる」すなわち頭声がもとの胸声をベースにうまく響くようになる、まずは一段階終了となる。

この段階に至るまでにも、呼吸法の習得や横隔膜の使い方など、たくさん身につけなければならぬ事がある。それと並行して声を構成する四要素、つまり声の高低、強弱、音色、そして息の使い方の方のコントロールをより一層精密にする訓練が行われる：——などと書くと、いったいどんなに容赦のない、血みどろのトレーニングが待っているのだろう、と心配になってくる。幸い内情はそれ程のことではなく、自宅での練習適量は一日二時間前後。練習が少なすぎるよりも、たび重なるリハーサルなどで声を長時間酷使して「歌いすぎてしまう」危険の方が、歌手にとっては恐ろしい。

一見楽そうではあるが、実情は果たしてどうだろうか？

音痴とカラオケ

赤ん坊が生まれた直後にあげる産声は、ほぼ例外なくピッチ四百四十のラの音（ピアノの中央より少し右よりのラ）だと言うし、生まれつき音痴の子供はまずくない、というのが一般的通説である。音痴とは、厳密な意味においては「歌が下手である」というよりは、「音感が鈍い」とするのが正しい。オンチ、と一言で片づけてしまつては身も蓋もないが、その要素は何種類かに分類できる。

音感の発達の優劣は、人間がまだ赤ん坊の頃に母親から繰り返し歌って聞かされる子守歌に左右される事が多い。音痴の親の歌をたえず聞いていると、その子も音痴になりやすい。音感が一番発達するのは四才から六才の頃で、この期間に子供に専門的な訓練を施すと、「絶対音感」というものをも身につけさせることができる。

この「絶対音感」があると、たとえば下駄がカラコンロンという音や茶碗を箸で叩いて出した音の高さを即座に言い当てたり、ひじや手の平でめちやくちやに弾かれたピアノの和音——普通の人にとってはただの雑音であるが——の構成音を聞き分けたりできるようになる。ボンと弾かれたラの音を聞いて、この音が一秒間に四百四十回か四百四十一回か四百四十二回か、あるいはその中間の振動数の音かもすぐわかってしまう。そしてド、と思えばド、ミと思えばその高さの音を、何の楽器の助けもなく自分の声で正確に出せるようになれば本物である。

余談ではあるが、第二次世界大戦中はこの絶対音感を持った音楽家達がかり出され、遠くから響いてくる